

# 特別S級隊員比企谷八幡 真説

ケンシシ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

特別S級隊員のリメイク？版。内容はだいぶ変わります。

目

次

ある日の訓練

奉仕部 ①

比企谷八幡

奉仕部 ②

材木座義輝

比企谷八幡

戸塚彩加

32 27 22 15 10 5 1



# ある日の訓練

およそ三年前……奴らは突如現れた。今ではゲートと呼ばれるものをくぐりやつてくる異形の怪物たち。それはネイバー（近界民）と呼ばれた。

「こいつらの事は任せてほしい。我々はこの日の為に鍛えてきた」

異形の侵略者が人々を蹂躪する中、突如現れた一団はネイバーを駆除していき、その後、境界防衛機関「ボーダー」と呼ばれる組織が結成された。

ボーダー結成の事件は『ネイバー大侵攻』として人々の記憶に刻まれた。

そしてネイバーカー大侵攻から2年ほどたつたある日の訓練室、その中の仮想空間で2人の人物が戦っていた

ガキン！ガキン！ガキン！

「どうしたんすか？太刀川さん、いつもの威勢がないですよ？」

「いやあ、少しは近づいたと思つたんだがなあ」

目が腐つた少年と太刀川と呼ばれた青年はお互い二刀流の刀で激しい応酬を繰り広げていた。2人が使っているのは孤月という近接トリガーである。他の近接トリガー

には形などを自在に変えられるスコープオン、シールドモードとスラスター機能をもつブレードトリガー、レイガストがある。

「これならどうだ?『旋空孤月』」

太刀川は地形を利用し、一瞬、距離を離し必殺の一撃を叩き込もうとする。旋空とは孤月専用のオプショントリガーで簡単に言うと伸びる刃である。

『旋空孤月』

少年の全く同じ技で相殺されてしまった。

「旋空には自信あんだけどなあ、自信無くしちまいそうだ。」

「威力なら忍田さんにも劣らないと思いますよ?ただ……」

居合の要領で少年の刀が抜き放たれた。

「まだ速さがたりないですね」

一閃は太刀川だけでなく、その後ろ30メートルくらいまで切り裂いていた。そして切り裂かれた太刀川は彼らが使うトリガーと呼ばれるものに備えられている脱出機能、ペイルアウトで飛んでいった。

「ようやく終わつたか?」

そこにスーツ姿の男が現れた。太刀川と少年の戦いが終わるのを待っていたようだ。

「二宮さん、俺はいつでもいいですよ」

「ふん：『アステロイド』」

二宮と呼ばれた男はキューブ状の光の塊を出現させると細かく分割し少年に向かって打ち出した。アステロイドと呼ばれる射撃トリガーである。他に誘導弾のハウンド、自在に軌道を設定できるバイパー、爆発するメテオラが射撃トリガーには存在する。『シールド』『アステロイド』『

少年は本来なら一枚の板のようなもので攻撃を防ぐシールドを細かく分割して、二宮のアステロイドを相殺。そして二宮以上の大きさのキューブを出現させると分割し、撃ちだした。

「つち」

二宮は最低限をシールドで防ぎながら少年のアステロイドをかわし凌いだが『ハウンド』

さらに少年から弾が撃ち出され、二宮の逃げ道を限定するように降り注ぎ

「面白いものを見せてあげますよ、アステロイド＋アステロイド……『徹甲榴弾（ギムレット）』」

二宮がある程度離れるよう誘導し、離れた場所に向け2つのキューブを合体させ撃ち出した。

「シールド！……なつ！」

普段なら全部とはいからくとも致命傷だけは避けられるよう防げるシールドがあつさりくだかれ、弾丸は二宮の体を打ち碎いた。

これはとある日に行われたボーダーの戦闘力2トップに対しての特別な訓練の一部始終である。これを機に太刀川は孤月の腕をより磨き、二宮は出水という天才射手の存在を教えられ、少年が使った攻撃を教えてもらうため師事しさらに力をつけたのだつた。

ボーダー2トップと平然と渡り合う少年の名は『比企谷八幡』現ボーダー最強の戦力と言われている少年である。

# 奉仕部 ①

『青春とは嘘であり悪である。

青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境のすべてを肯定的にとらえる。

彼らは青春の二文字の前ならばどんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げて見せる。

例えば万引きなどによる犯罪行為、警戒区域などへの進入。これらを若気の至りと言つて済ませてしまおうとする。それがどれだけの人に迷惑をかけるか想像せずにだ。

彼らにかかれれば嘘や失敗や罪科や危険行為さえも青春を楽しむためだけのスペースに過ぎないので。

結論を言おう。青春を楽しむ愚か者ども碎け散れ！』

「比企谷、私が出した課題は何だつた？」

とある県にある総武高校、そこの職員室で1人の女性がある作文の一部を取つて呆れていた。

「高校生活を振り返つて、ですね」

質問に答えたのは比企谷八幡、ボーダー最強の男である。

「君がサイドエフェクトで苦労したりしているのはわかっているが、もう少しまともなのは書けないのか？こんな考えだから腐った魚のような目をしてるんじゃないか？」

「なんだかDHA豊富そうですね、平塚先生」

彼を職員室に読んだのは国語担当の平塚女史である。

「まつたく、君には友達や彼女はいないのかね？」

「ボーダーの仲間とはそれなりに……彼女はいないですが」

そう八幡が答えると

「そうだろそうだろ、確かに君に彼女がいるとは思えないがな！」

彼女がいないのを嬉しそうに言う平塚に

「先生は彼氏いないんですか？」

八幡が余計な事を言つた瞬間に八幡に拳が飛んできた。あつさりかわしたが

「女性に余計な事を言うなど教わらなかつたか？」

若干怒り気味の平塚を無視して八幡は

「まあ作文は書き直します、それで良いですか？」

「それは当然として、君の心ない言葉で私の心は傷つけられた。君には奉仕活動をしてもらう」

そうして八幡はある教室まで連れて行かれ、そこには

「入るぞ、雪ノ下」

「先生、ノックくらいはしてくださいと毎回言っているのですが……」

「君は返事をしないじゃないか」

「する前に入つてくるからです。ところでそちらのヌボーつとした人は?」  
中にいたのは八幡でも知つてゐる美少女だつた。入学式の時に代表挨拶を務め、学年主席だという雪ノ下雪乃である。

「こいつは比企谷八幡、入部希望者だ」

「は?俺は部活なんて入らないですよ?」

平塚の言葉にそう返すが

「うるさい、異論反論は受け付けない」

そう言い切ると教室を出て行く平塚にため息をつく八幡。

「よく分からぬのだけれど、座つたらどうかしら?比企谷くん」

「お、おう」

八幡と雪ノ下は少なからず因縁がある。それは入学式の日に車に轢かれそうになつた犬を助け八幡が代わりに車に轢かれたのだが、その車に乗つていたのが雪ノ下雪乃だつたのである。

「久しぶりね……」

「そうだな」

雪ノ下家は轢いてしまった少年を調べて驚いた。一般のボーダー隊員ならまだ穩便に済むだろう……だが轢いてしまったのはボーダーの最高戦力であることはすぐに分かつた。雪ノ下家は当主である雪乃下雪乃の母親と雪乃も一緒に謝罪と見舞いに向かつたのだが

『別に気にしなくて大丈夫ですよ、良い機会だから休めと言われたくらいですし』

さらにボーダー本部長や八幡の上司とも話したが、犬を助ける為とはいえ飛び出した八幡が悪いと逆に謝られたくらいだ。

「で? ここは何なんだ? 訳も分からぬまま連れて来られたんだが」

「全く、あの先生は……持つ者が持たざる者に慈悲の心を持つてこれを与える。人はそれをボランティアと呼ぶわ、途上国にはODAを、ホームレスには炊き出しを、モテない男子には女子との会話を。

困っている人には救いの手を差し伸べる……ようこそ奉仕部へ」

「一部変な単語が混じってた気がするが何となく分かつたわ」

八幡が言うと再び扉が開き

「何をイチャついてるんだ!? 青春の馬鹿野郎!!」

変な言葉を言いながら平塚が入ってきた。

「平塚先生、入る時はノックを」

それを無視して雪ノ下が淡淡と言う。

「つぐ、さつきは説明を忘れてたが雪ノ下には入部という形でそいつの矯正を頼みたい」

八幡の捻くれた考えや腐った目は矯正しないと将来が危ういと平塚は語り

「では任せたぞ」

言うだけ言うと、平塚は教室から出て行つた。

「どうするの？比企谷くん。貴方が必要ないと考えているのならこの件はなかつたことにするわ」

「はあ……全く知らない奴じやないだけましか。まあ、しばらく世話になるわ」

学校で一人なんじやないかとか心配してた妹や上司であり親代わりでもらあるおつさんも、これで少しは安堵するか？と考える八幡だつた。

# 比企谷八幡 ①

『対ブラックトリガー訓練を開始します』

通常の仮想訓練とは違う様のマップが展開される。通常は様々な特徴を持つた世界が形作られるが、今はそれらが複合的に合わさった空間が作られていた。そして訓練を受ける3部隊は飛行機の様な乗り物、近界への遠征艇の周りに転送された。

『今日は射撃戦特化との事だよ』

全員に聞こえるようにA級1位太刀川隊のオペレーター、国近由宇が情報を話す。

「なるほど、今日は厳しそうだ」

それを聞いた太刀川がボヤく。

『膨大なトリオン反応!! 遠征艇障壁を展開!!』

警戒を行なつていた風間隊のオペレーター、三上が遠征艇に向かつて放たれた攻撃を検知。遠征艇にある防護シールドで降り注ぐトリオンの弾丸を防いだ。

「今のはおそらくハウンドか、あまりゆつくりもしていられないようだな」

風間隊、隊長の風間が言う。

『こちらにゆっくりと近づいてくるトリオン反応があります。おそらくターゲットで

す』

二宮隊オペレーター、氷見が伝える。

「相手は射撃特化になつた比企谷だ。全員で囲み、氣を散らせ当てる奴が首を取る。」

「二宮がそれで良いか?と全員に確認し異論はでなかつたので戦闘態勢に入つた。」

「んじやま、いきますか『変化弾+炸裂弾Ⅱ変化炸裂弾』」

太刀川隊の出水の得意とする合成弾の奇襲を皮切りに本格的な戦闘が始まつた。

戦いは凄まじいものとなつた。射撃トリガーは強靭なシールドに阻まれ、近接組みが近づこうにも縦横無尽に飛び回る変化弾(バイパー)に邪魔される。それを搔い潜つたら次は恐らくボーダー最強の威力を誇るアステロイドに晒される。

比企谷八幡……凄まじいトリオン量を誇り、『五大感覚強化』のサイドエフェクトを持つ。八幡の視野は1kmに及び、視線などを敏感に感じとる。犬などには及ばないながらも細かな匂いを嗅ぎ分け、聴覚も特化して菊池原に一步及ばないながらも聞き取る範囲は広い。味覚も常人より良いため妹や料理ができる親しい人からは味見をよく頼まれる。そして両親が旧ボーダーからの関係者だつた事もあり幼い頃から訓練を受け、超感覚を十全に振るえるようになつた八幡は存在がブラックトリガーとまで言われた。

「ふう、何とかなつたな」

「今日は勝てると思ったんですけどね……さすがA級部隊です」

太刀川の一閃を受けて八幡が倒され訓練は終わり、勝利した3チームは次の遠征の最有力候補となるはずだつたが……

「やはり、鳩原は人を撃てないようだな」

ボーダー総司令の城戸が訓練の映像を観て呟く。

「だが彼女の狙撃の腕は確かだ、連れて行つても問題ないのでは？」

ボーダー本部長、忍田が言う。

「私は反対ですが、遠征艇は狭い。同じスナイパーなら明確な戦力を連れて行くべきです」

開発室長の立場の鬼怒田が考えを述べ、

「私もそう思いますねえ、鳩原隊員の狙撃の腕はあるがそれなら冬島隊の当馬くんや三輪隊の奈良坂、なんならB級隊員でも十分な腕を持つ隊員はいくらでもいる。」

広報担当の根付が言う。

「林藤支部長はどう考える？」

忍田が玉狹支部、支部長の林藤に聞くと

「うーん、うちの主義としちゃ鳩原ちゃんが良いけど……戦力どうこうよりもいざ敵対した時に敵の明確な殺意に耐えられるかが心配だね」

ボーダー内のランク戦はあくまで訓練の一環であり、トリオン兵はあくまで機械のような物のため、殺し合いというものをボーダー隊員は当たり前だが感じたことはない。訓練でも人を撃てないメンタルの持ち主が過酷な環境で耐えられるか、林藤はそこが不安であった。

「唐沢くん、君はどう考える？」

営業部長の唐沢に城戸が聞く。

「まあ、少々過激ですが一度極限まで追い詰めるのはどうでしょう？やり方は色々あるでしようが、追い詰めて追い詰めて……それでも戦力にならないと判断した場合は遠征から外せばいいかと」

そして唐沢の意見が採用された。

後日、二宮隊が司令室に呼ばれた。

「君たちには追加で試験を受けて貰う」

その内容は二宮隊だけで八幡をペイルアウトまで追い込めというもと、失敗した場合は今回の遠征から外すというものだつた。断ればもちろん遠征部隊の件は無しである。

「了解しました」

そう二宮は返事をしたが……

結果は惨敗と言えるものだつた。

二宮隊は鳩原以外全滅した。そして鳩原は最後の最後まで人をどうしても撃つ事が出来なかつたのである。

「ユズル、やつぱりあたしはダメなやつなんだ……」「めんね」

弟子のような少年にそう伝えた鳩原はしばらくしたある日、一般人を連れて近界への密航を行なつた。そして二宮隊はその責任を負い、B級へと降格させられた。

# 奉仕部

(2)

「うつす」

時は少し戻り、ある日の放課後。八幡は半分強制ではあつたものの入部した奉仕部に顔をだした。

「比企谷くん。あと挨拶はちゃんとした方がいいわよ」

八幡が部室となつて いる教室に入ると少女がいた。奉仕部部長の雪ノ下雪乃である。  
「あー、悪かつたな。こんにちは、雪ノ下」

「はい、こんにちは。これで1つ矯正したわね」

「あ、それの効果あつたのね」

八幡がため息をつきながら言うと

「任されたからには多少はね」

そして八幡は適当な椅子に腰掛けると

「聞きそびれてたんだが、奉仕部つて具体的に何をするんだ?」

「平塚先生が生徒を連れてきて、悩みを聞いて対処するといった感じよ」

それまでは自由にして良いと雪ノ下が言うと、八幡そそくさとラノベを読みだした。

「雪ノ下、比企谷いるか?」

そなうこなうしていると平塚先生がノックせずに入つてきた。

「平塚先生、何度も言つてますがノックしてください」

「はつはつ、まあいいじやないか。今日は依頼人を連れてきたぞ」

そして平塚が入つて来いと言うと1人の少女が入つて來た。

「失礼しまーす……つて何でヒツキーがいるし!?」

入つて來た少女は八幡を見るなりそう叫ぶ。

「ヒツキーってまさか俺か?」

「そなうだし」

八幡の疑問に答える少女。

「俺は引きこもりじやないし、なんなら働いている。というか誰?」

「2年F組の由比ヶ浜結衣さんね。貴方と同じクラスよ」

八幡の疑問に雪ノ下が答えると

「え? クラスマイトなのに知らないとかありえないし!!」

「な、なんかすまん……」

「謝られるのも何かムカつく!!」

そなう思わず由比ヶ浜が嘆いていると

「ところで由比ヶ浜さん、何か依頼があるのでないかしら？」  
雪ノ下が仕切り直すように聞くと

「え、えーと？ そのお……」

由比ヶ浜はチラチラと八幡を見ながら言いにくそうにしていると

「何か飲み物買つてくるわ」

八幡はそう告げると部室を後にした。

ガコンッ

自販機まで来た八幡が飲み物を買つていると

「あれ？せんぱあーい、何してるんですか？」

1人の女子生徒が話しかけてきた。

「ん？一色か。学校で話しかけてくるなんて珍しいじゃねーか」

女子生徒の名は一色いろは。ボーダーの後輩の1人である。

「ボーダー本部以外で話さないのは先輩が姿をなかなか見せないからじゃないです

かあ」

頬を膨らませながら言う一色に

「あざとい」

そなばつさり切り捨てる八幡。

「あざとくないです！」

そうあざとく怒る一色いろは。

「で？おまえらのとこの隊は今日は防衛任務なんじやないのか？」

「え？ 可愛い後輩のスケジュールはしつかり把握しているアピールですか？ 先輩が私のことを知つてくれてるのは嬉しいですがもつと時間の余裕があるときにアピールしてください、ごめんなさい」

「何だ、先輩アピールつて……というかおまえのとこのオペレーターはあいつだぞ？ 知つてて当然だ」

そう言う八幡に

「まあそうですよね。先輩みかけたから話しかけただけなんで、失礼しますね」

そう言い一色はその場を去つていった。

「やつぱりあざとい」

手を振りながら去つてくいく後輩を見ながら八幡はそう呟いたのだった。

『家庭科室にいます』

八幡が奉仕部に戻るとそう書き置きが残されていたので、家庭科室に向かうと  
「なぜこうも失敗を重ねられるのかしら？」

「あ、あはは」

木炭のような何かを作っている由比ヶ浜とそれを見て頭を抱えている雪ノ下がいた。  
「これはどういう状況なんだ？」

「ある人にお礼の手作りのクツキーを渡したいそうなのだけれど……」

雪ノ下の視線の先にはクツキーとは程遠い炭の塊があり

「もう一度作ってみましょう」

雪ノ下が声をかけ再度作るができたのは変わらず、炭の塊だった。

「どうしてこうなるのかしら……」

「やつぱり私には才能ないのかな?……」

再度頭を抱える雪ノ下の横で由比ヶ浜が呟いた時

「おい、由比ヶ浜。おまえ雪ノ下の教えをまともに聞く気はないのか?」

八幡の冷たい声が響いた。

「え?」

その声に驚く2人。

「さつきから見てたけど、雪ノ下が目を離した隙に調味料の分量とか勝手に変えたりし

てるだろ」

「え、えーと……砂糖とか多い方が甘くて美味しいじゃん?」

八幡はため息を吐くと

「何の知識もないのに余計なことをするから失敗するんだろうが……教えてもらう立場なら、まず言われたことはちゃんとしろ。アレンジしたいならその後に聞きながらすれば良い」

八幡は一息つくと

「何にでも才能の有無とかはあるけどな由比ヶ浜……おまえはそんなレベルにすら立てねーよ。もつと真剣にしないと時間を割いてる雪ノ下に失礼だろ」

そう八幡が言うと一瞬、家庭科室が静かになつたが

「ごめん、雪ノ下さん。もう一度教えてください!!」

由比ヶ浜がそう言い、頭を下げる。

「言いたいことは全部、比企谷くんに言われだし……今度はしつかりしてもらうわよ、由比ヶ浜さん」

「うん！」

そうして再度クッキー作りが始まつた。

「で、出来た……」

しばらくして由比ヶ浜の手作りのクツキーが出来た。今度のは多少不恰好ながらもちゃんとしたクツキーとなつていた。

「ありがとう！ 雪ノ下さん、ヒツキー！」

そう嬉しそうな笑顔を浮かべた由比ヶ浜に雪ノ下が

「それで？ 言わないといけないことがあるんじやないかしら？」

由比ヶ浜にそう何かを促す。

「えと……ヒツキー……ううん、比企谷くん！ 1年前にサブレを助けてくれてありがとうございました！」

そう涙を流しながら礼を言う由比ヶ浜に

「ん？ どういうことだ？」

疑問を浮かべる八幡に雪ノ下が1年前の事故の原因の犬の飼い主が由比ヶ浜であることを伝え

「なるほどな……まあ俺の方は気にしなくていいぞ。これはそのお礼か……」

そう言うとクツキーを1つ手に取り食べる八幡。

「うん、美味しいぞ。由比ヶ浜」

その八幡の一言にこの日1番の笑顔を見せる由比ヶ浜だった。

# 材木座義輝 ①

「何してんの?」

八幡がいつものように奉仕部に向かうと雪ノ下と由比ヶ浜が部室を覗き込んでいた。  
「きや!?……驚かさないでくれれかしら?」

「あつ、ヒツキー!」

2人が言うには部室に見知らぬ男がいるらしい。

「誰だ?……はあ」

八幡は中を見て人物を確認すると盛大にため息をついた。

「大丈夫な奴だから入ろうぜ」

八幡は気怠げにそう言うと部室に入つていき、雪ノ下と由比ヶ浜も続いた。

「何してんだ?」

「おお! 来たか我が師であり最強の友よ!」

「あなたの知り合いかしら?」

「遺憾ながらな」

2人のやり取りを見た雪ノ下が八幡に聞くとげんなりしながら答える八幡。

「ふつふつふつ、話は聞いているぞ八幡！お主は我の願いを叶える義務があるとな!!」

材木座がそう言うと雪ノ下が一步出で

「依頼はその変な喋り方を治すということで良いかしら？」

「え、あ、いや……違います」

「キャラ崩れるのはえーよ……」

雪ノ下に話しかけられ、あつさりキャラ崩壊する材木座を見て呆れた八幡。

「雪ノ下、そいつは中2病と言つてだな……」

そして八幡が中2病について説明すると

「なるほど、妄想と現実の区別がつかないと……」

「うわあ……」

「まあ、そう言う感じだ」

雪ノ下は哀れみの目を向け、由比ヶ浜は引いていた。そしてその説明で既に瀕死な材

木座だつたが気をとりなおすと

「我の依頼はこれだ、八幡！」

そう言うと材木座は紙束を出した。

「これは何かしら？」

「これは我の「普通に話してくれないしら？」……僕の書いた小説です、はい。」

「それを読んでこいと……」

「その通りで……はい、そして感想ください」

雪ノ下にひと睨みされ、萎縮しつつも材木座は依頼を話した。

「わかつたよ、ただ感想ならインターネットでも良いんじゃねーのか？」

「いや、あいつら容赦ないし」

その材木座の言葉に、雪ノ下のが容赦ないだろうなと八幡は思つたが口には出さなかつた。そして奉仕部3人は材木座の原稿をコピーし各自持ち帰ることとなつた。

「そうだ、八幡よ」

「どうした？」

帰りに材木座が八幡に話しかけてきた。

「たまには玉泊にも来いと木崎さんが呼んでおつたぞ。というか小南嬢が腕試しができないと、我に憂さ晴らしを……」

そう言い遠い目をする材木座に

「ああ、すまなかつたな。近々行くと伝えといてくれ」

「絶対だぞ！それに我的修行の相手もしてもらわねばな!!」

それだけ伝えると材木座も帰つていった。

そして翌日、八幡は眠たい目をこすりながら奉仕部にきていた。

「では感想を聞かせていただきたい」

全員が集合すると材木座がそう切り出した。

「では私から……つまらなかつた。読むのが苦痛ですらあつた。」

そこからダメ出しがしばらく続き

「つうぐ、次を……」

「えつとつぎは私かな?……む、難しい字をたくさん知つてゐるね!」

材木座に促され由比ヶ浜はてきとうにそう言うと

「最後は俺だな」

縋るような視線の材木座にたいし

「で?これは何のパクリだ?」

「ぐはっ!!」

八幡の言葉がトドメになり、材木座は崩れ落ちた。

「みな、ありがとう……また読んでもらえるだろうか?」

おもむろに立ち上ると材木座がそう聞くと

「つぎはもつと文法からしつかりしてほしいわね」

「ヨ、読むかも?」

「まともなの書いて来いよ」

材木座はそれを聞くと

「ありがとう、皆の者！ 我の次回作を楽しみにするが良い!! ではさらばだ！」

そう言うと材木座は出て行つた。

「これで良かつたのかしら？」

「本人が満足したんだから良いんじやねーの？」

雪ノ下の疑問にそう答える八幡だつた。

## 比企谷八幡

(2)

「こんにちは、鬼怒田さんいます？」

ある日の放課後、八幡はボーダー本部の開発室に来て いた。

「おお、来たか八幡！専用トリガーの試作が出来たからテストだ」

そこに身長の低いおっさんがやつてきた。見た目こそちんちくりんな感じもするがボーダー本部の開発室室長を務める凄腕の技術者である。

「あれ、出来たんですね」

「まだ試作段階だがな。まあ、それはそうと……最近の学校はどうなんだ？ 部活にも入ったのだろう？」

テストルームに向かう道すがら、鬼怒田はそう聞きだした。

「問題ないですよ、部活も平和だし。それに部員が知らない人じやなかつたですし」

「そうか、わしも小町も学校じや1人じやないかと心配しておつたからな。今度の部活は良い機会だつたわい」

そう言い笑う鬼怒田。鬼怒田は八幡が荒れていた時に諭してくれた人物である。それから八幡は鬼怒田に深い恩を感じて いる。

「それでだ、お主の専用トリガーだが……遠征などで使うのはワシは正直反対じゃ」

「1つのトリガーを持つてきた鬼怒田はそう言う。

「でも今のノーマルトリガーだとトリオンの持ち腐れすからね」

余りにも膨大なトリオンを持つ八幡は最大で

も8つしかトリガーを使えない状況に限界を感じていたのだ。

「まあせつかく作つたのだから、試してみるか」

そして鬼怒田からトリガーを受け取った八幡はテストに向かう。

1時間くらい試した結果

「うーむ、やはりまだまだじやな」

「そうすね、でもこれ完成すれば存分に戦えそうです」

試作トリガーを実際に動かすと色々と問題が出てきたのだ。

「うむ。今日はこれで終いじや」

「ありがとうございました。じやあ俺はこれで」

そして開発室を出て行き、とある場所に向かつた。

「こんばんは～」

「あ、お兄ちゃん!!」

とある建物に入ると八幡を兄と呼ぶ少女、妹の比企谷小町が出迎えた。

「あ、八幡くん。いらっしゃい」

その後ろから女性も出てきた。

「ゆりさん、久しぶりです。」

女性は林藤ゆり、玉狹支部の支部長の姪である。

「ふふ、お茶にしましようか」

「あ、はい」

そう言うゆりに着いて行く八幡。

「お兄ちゃん、今日は大忙しだよ！」

八幡の隣に来て小町が不穏な事を言い出す。

「は？」

「あ！八幡！あんた来てたのね！」

そこに燃え尽きたようになつている材木座を引きずつて少女がやつてきた。

「小南、もう少し手加減してやれよ……」

燃え尽きた材木座を見て顔を引きつかせながら言う八幡。

「うちと関わるなら弱いままだと困るのよ。こっちまで弱いと思われたらムカつくじやない」

「気持ちは分かるけどな……」

「じゃあ、あんたが弟子にして面倒みなさいよ」

「断る」

小南の提案を即座に却下する八幡。

「え？ 酷くない？ 八幡」

そう涙を流しながら言う材木座だが、2人からは無視され

「まあ、小南の憂さ晴らしには付き合ってやるよ」

「そうことなくつちやね！」

そして小南は嬉しそうにトレーニングルームに向かい、八幡はやれやれと付いていつた。

「くつ……やつぱり勝ち越せない」

「俺も訓練とかは欠かしてないからな」

10本勝負で7：3で八幡に負けた小南は悔しそうにしていた。

「比企谷くん！私たちにも稽古つけてよ！」

「陽乃さん、来てたんですね」

八幡に話しかけたのは雪ノ下陽乃だつた。雪ノ下雪乃の姉であり八幡が事故にあつた時に実家にすぐに八幡の事を知らせた人物である。

「私もいますよ！先輩！」

そこに一色も存在アピールする。

「雪ノ下隊、揃い踏みかよ」

雪ノ下隊……一応は本部所属のA級9位の部隊である。リーダーは個人総合8位の『オールラウンダー雪ノ下陽乃』である。それに『攻撃手、材木座義輝』と『スナイパー一色いろは』。そして『オペレーター 比企谷小町』の4人で構成されている。

「小町が忙しくなるつて言つてたのはこれか……」

そうボヤく八幡に小町は「ヒヒッとイタズラぽい笑みを浮かべたのだった。

# 戸塚彩加

ある日の昼休み、八幡がベストプレイスと呼ぶお気に入りの場所で昼食に購買で買ったパンを食べていると

「ヒッキー、こんなところで食べてたんだ」

「ん？ 由比ヶ浜か」

ジュースを2本持った由比ヶ浜が話しかけてきた。

「いつもならウエイウエイしてるのでジュース買いに来てるなんて珍しいな」

「アハハ……ゆきのんにジャンケンで負けて、その罰ゲーム」

「俺と話すことがか？ それより雪ノ下がそんな勝負よく受けたな」

「罰ゲームはジュース買いに行くだから！ あと、負けるの怖いの？ って聞いたらノツてくれたよ」

八幡は内心、どこまで負けず嫌いだと呆れていますとテニスボールが転がってきた。

「あ！ 由比ヶ浜さんに比企谷くん！」

「やつはろー！ さいちゃん！」

2人は挨拶をかわしているが、誰か分かつていよい八幡。

「由比ヶ浜、知り合いか?」

「同じクラスのさいちやんだよ!?!」

「アハハ、同じクラスの戸塚彩加です」

同じクラスと聞いた八幡は

「すまんな、同じクラス……特に女子のことは覚えてないんだわ」

「ヒツキー、さいちやんは男子だよ」

「よく間違われるんだ」

「え?……ほんとすまん……」

さすがに、いたたまれなくなつた八幡だつた。

「さいちやんは部活の練習?」

「うん、そうだよ!先輩が引退するから頑張らないといけないからね」

へーっと由比ヶ浜がポケーっとした反応をしてると

「そうだ!比企谷くんつてテニス上手だよね!?良かつたらテニス部に入つてくれないかな?」

「あー、すまん。他にすでに部活入つていてな。それでなくとも放課後はちょっと忙しいんだ」

八幡の答えに少し残念そうにする戸塚だつたが、気をとりなおしたようで

「無理いつてごめんね。じゃあ僕はいくね」

戸塚はそう言うとボールを取つてテニスコートに去つていった。

「ところで由比ヶ浜、罰ゲームのジュースは持つて行かなくていいのか?」

「あっ!?

そして由比ヶ浜も慌てて戻つていった。

そして放課後、八幡と雪ノ下がいつものように奉仕部にいると

「やつはろー!! 依頼人連れてきたよ!」

「ど、どうも……」

由比ヶ浜が戸塚を連れてきた。

「いやー、私もやつぱ奉仕部の一員として何かやりたいと思つてね」

「由比ヶ浜さん、貴方は部員ではないのだけれど…。…入部届けなども受け取つてないのだし」

それを聞いた由比ヶ浜は慌てて

「にゅうぶとどけ、くらいいくらでも書くよ!!」

ルーズリーフを取り出すと『にゅうぶとどけ』と書き始めた。

「それで？ 戸塚の依頼つて何だ？」

「えっと、由比ヶ浜さんが強くなりたいならここを頼れば良いって」

それを聞いた雪ノ下は頭をかかえ

「由比ヶ浜さん、この部の方針とかは知つてるのかしら？」

「えっと、ゆきのんなら出来ると思つたんだけど……やっぱ出来なかつた？」

由比ヶ浜にその気はなくとも挑発に聞こえた雪ノ下は

「フフツ……良いでしよう、由比ヶ浜さん。 その挑戦受けるわよ」

「はあ……」

暗い笑みを浮かべている雪ノ下を見て八幡はため息をつくのだった。そしてこの日は戸塚の普段の練習からどれだけ動けるかなどの確認をした後、特訓メニューを考えるなどで一度解散となつた。

そして特訓は次の日の昼休みから始まつた。

「とりあえず戸塚くんは基礎体力作りから始めてみましょう」

そして走り込み、腕立て伏せ、腹筋などを八幡と由比ヶ浜もついでにやり昼休みが終わろうとしていた。ちなみに雪ノ下は戸塚が無理などしていいか観察していた。

「はあ、はあ……僕って結構体力ないんだ……比企谷くんは凄いね」「はあ、はあ、疲れたあ」

戸塚と由比ヶ浜はバテており、息が少し荒くなっていた。

「（美少女の由比ヶ浜と戸塚が息あげてるのはちょっとくるな……）まあ、普段から鍛えてるからな」

「変態谷くんは無視して、戸塚くんはまあまあの体力ね。これならテニスの練習しながら体力をつけた方がいいかもしないわ」

雪ノ下は八幡をジト目で見た後にそう話した。

「比企谷くんは考えていることが顔に出やすいから気をつけた方がいいわよ」

「お、おう……」

最後に雪ノ下が八幡に注意してその場は解散した。

それから数日間の昼休みは戸塚の練習に付き合っていた。そんなある日の昼休み  
「あつ……」

雪ノ下が放るボールを打ち返すという内容の練習をしていたところ、戸塚が転んでしまい膝を擦つた。

「ふう、一度休憩を挟みましょう。私は救急箱を借りてくるわ」

そして雪ノ下がその場を離れると

「雪ノ下さんを怒らせちゃったかな」

「いや、あいつはこれくらいで怒らないだろ」

落ち込む戸塚にそう八幡が返したところに

「ねえ、テニスして遊んでるならうちも混ぜてくんない？」

1人の女子生徒の声が響いた。

「あ、優美子……」

話しかけてきたのは三浦優美子、八幡たちのクラスメイトで一番派手なグループのメンバーである。

「ねえ、戸塚。久しぶりにテニスやりたくなったから、あーしも混ぜてくんない？」

「三浦さん……今は比企谷くんたちに練習の手伝いしてもらつて……」

どちらかと言うと氣弱な戸塚は少しまづまじしながら話すと

「何て？聞こえないし！男ならもつとはつきり話すし」

「戸塚は練習してるんだよ、邪魔しないでくれるか？」

庇うように八幡が戸塚の前に立つ。

「あ？ そ、うなん？。それならそ、うともつとはつきり言つてくんない？あんたが堂々としないから後輩のやる気ないんじやない？」

「どう言うことだ？」

八幡がそう聞くと

「あーし、中学の時にテニスしてたからたまーに放課後テニス部見てたんだけど、誰もやる気なさそうじやん」

三浦に痛いところをつかれたのか、暗くなる戸塚。

「えつと…：優美子、それでもさいちゃんは頑張ってるから応援してほしいな」

「ふーん……そこまで言うなら仕方ないか」

三浦はそう言うとな離れていった。

「何か様子おかしくないか？」

八幡は三浦の様子を見てそう思うのだった。